漢文の教材研究

――「史記」（鴻門之会・四面楚歌）――

森野繁夫

教材研究は、どんなに深く広くやっても際限のないものであるが、少くともこれだけはやっておかねばならないという最低の線は、おのずからあるように思う。以下、述べることは、私なりに考え行なってみたものの覚え書きである。使用した教科書は、明治書院の「漢文」（古典乙1）であり、参考書は「史記」の「項羽本紀」「高祖本紀」「秦始皇本紀」それに「留侯世家」「樊酈勝灌列伝」などである。

言うまでもないことであるが、「鴻門の会」にはいるまえに、やはり当時の中国の社会情勢についての説明、その中における項羽と沛公の行動の説明がなされなければならないだろう。ここでは一応、そのような説明が「項羽本紀」「高祖本紀」などによって行なわれたものとして、「鴻門の会」にはいることにする。

一、鴻門の会

○楚軍夜撃、阬秦卒二十餘万人新安城南、行略定秦地、至函谷関。有兵守関、不得入。又聞沛公已破咸陽、項羽大怒、使当陽君等撃関。項羽遂入至于戲西。沛公軍霸上、未得與項羽相見。

沛公左司馬曹無傷使人言於項羽曰、「沛公欲王関中、使子嬰為相、珍宝盡有之。」項羽大怒曰、「旦日饗士卒、為撃破沛公軍。」当是時、項羽兵四十万。在新豊鴻門。沛公兵十万、在霸上。范増説項羽曰、「沛公居山東時、貪於財貨。好美姫。今入関、財物無所取、婦女無所幸。此其志不在小。吾令人望其気、皆為龍虎、成五采。此天子気也。急撃勿失。」

この部分で何よりも大切なこと、つまり司馬遷が最も力を入れて書いているのは、項羽の「怒り」であろう。「項羽本紀」を通してみても、彼が笑ったのはただの一度、すなわち、その烏江における最期の場面、

項王乃欲東渡烏江。烏江亭長艤船待。謂項王曰、「江東雖小、地方千里、衆数十万人、亦足王也。願大王急渡。今独臣有船。漢軍至無以渡。」項王笑曰、「……」

だけであり、何時も怒ってばかりいる。そのように怒りに怒る項羽の、この段における怒りは、次第にその激しさを増してゆくものとして描かれている。

まず新安城の南で秦卒二十余万人を阬うめにした項羽は、秦の地を略定して目指す函谷関にたどり着いた。ところが、誰か自分より先に函谷関にはいり、楚軍の進撃をはばんでいる者がある。項羽の自尊心はいたく傷つけられた。司馬遷は何も書いてはいないが、項羽の怒りは、この時すでに始まっていたとみてよかろう。

そのうちに、沛公が既に秦の都の咸陽を陥しいれるしまった、という情報がはいってきた。項羽は「大いに怒った」。そうして当陽君黥布らに命じて一気に関を突破させた。

項羽が怒ったのは何故か。すでに暴秦討伐を旗印としてかげる諸侯たちに擁立された楚の懐王が「先に秦を破りて咸陽に入る者は、之を王とせん。」と諸将と約していたのだから、項羽の怒りは筋の通ったものではない。しかしそんなことは項羽の意識にはない。あるのはただ、誇りを傷つけられた常勝将軍としての、またライバルに先をこされた者としての怒りだけである。

さて、怒りにまかせて、函谷関を守っていた沛公の兵を蹴ちらした項羽の軍は、そのまま戯西まで兵を進めた。沛公の軍は四十里先の覇上にある。自分をさしおいて咸陽にはいった沛公。己の自尊心を傷つけられた項羽は、沛公に対してどのような処置をとるべきか、まだ判断がつかないでいた。

そうして、そのまま沛公の軍と対峙している項羽のもとに、沛公の左司馬曹無傷が、こっそりと人を遣わして、「沛公は関中に王たらんと欲し、子嬰をして相たらしめ、珍宝盡くこれを有す。」と伝えてきたのである。この内通してきた曹無傷のことばに、項羽は「大いに怒り」、そのまま「旦日　士卒に饗し、為に沛公の軍を撃破せよ」と、諸将に命ずる。項羽の怒りは、ここに最高潮に達する。曹無傷の「珍宝盡く之を有す」ということばが、とりわけ項羽を刺戟したことは言うまでもない。それは項羽が、この上なく楽しみにしていたものであったろうから。

このように燃えあがった項羽の怒りを、沛公打倒の一点に集中させたのは、亜父范増の意見である。范増には、沛公がただ者でないことが、下手をすれば項羽に傾きかけている天下を、沛公がさらってしまいそうな予感が、していたに違いない。そこで、沛公を撃つのは今をおいてなしと判断し、項羽に「急ぎ撃ち失すること勿れ」と説くのである。

范増は時に七十歳の老人。彼にとって、当時二十七歳の項羽は、孫のような存在である。孫にでも言ってきかせるように、范増は念を押し、かんでふくめるように、沛公が油断のならぬ存在であること、決してうちもらしてはならぬことを説く。沛公の十万の兵に対して四十万の大軍を擁し、絶対的な優位にある此の機会を逃がしては、この後、二度と再びチャンスはめぐってこないであろう。范増は、今のうちに沛公を消すべしと、項羽の怒りを沛公撃破の決意に導びき、怒りの焦点を沛公にピタリと定めさせたのである。

以上のべてきたように、項羽はその「怒り」を、

有兵守関、不得入→（怒）

又聞沛公已破咸陽→項羽大怒

沛公左司馬曹無劉使人言於沛公曰……→　項沛大怒

范増説項沛曰……→（沛公撃殺を決意）

と、次第に昂ぶらせていっている。

この段のポイントは、ここにあるわけであり、したがって、そこに

中心を置いて読んでゆくことが必要であろうと思う。

ところで項羽のこのような「怒り」はどこからくるものかといえば、それは、項羽の性格と、沛公との関係にあるものと思われる。

まず項羽の性格については、「項羽本紀」の最初の部分に述べられている次のような挿話に、象徴的に示されている。

秦始皇帝游会稽、渡浙江。（項））梁与籍俱観。籍曰「彼可取而代也。」梁掩其口曰「毋妄言。族矣。」梁以此奇籍。

「奴など、とって代わってやるぞ。」という項羽のことばは、思慮のない、血気にはやる彼の性格をよく表わしているが、司馬遷は、項羽を相手に天下を争う沛公についても、同じような場面を設定している。すなわち「高祖本紀」に曰く、

高祖常繇咸陽、縦観、観秦皇帝。喟然太息曰「嗟乎、大丈夫当如此也。」

性急な項羽のことばに比べて、どこまでも落ちつきはらった沛公のことばが印象的であるが、これによって遷は、両者の性格の違いを端的に示そうとしたものと思われる。

さて、このような性格を持つ項羽が、ことあるごとに怒るの当然ではあるが、そのような項羽を更に怒り易くするのが、沛公の存在である。「どこの馬の骨ともわからぬ奴、ずるがしこい奴め。この俺様の前をちょろちょろと邪魔をしてまわる。腹の立つ野郎だ。」項羽は沛公について、このように思っていたにちがいない。

まず家柄の違いについていえば、「項羽本紀」に曰く、

項籍者、下相人。字羽。初起時、年二十四。其季父項梁。梁父即楚将項燕、為秦将王翦所戮者也。項氏世世為楚将。封於項。故姓項氏。

このように項羽は、世世楚の将軍の家柄であった。しかし一方沛公は、「高祖本紀」の初めに、

高祖、沛豊邑中陽里人。性劉氏、字季。父曰太公。母曰劉媼。

とあるように、布衣の出である。中田古典選「史記」（朝日新聞社）によれば、「劉季」とは劉氏の末子。「太公」とは祖父の世代に対する敬称で、「じっさま」「とっさま」。「劉媼」の媼は、老齢の婦人に対する敬称で、「劉ばあさま」くらいの意味を持つことば。つまり「劉季」「太公」「劉媼」は、すべて個々の人間を区別する正式の名ではなく、村の人たちが、多少の敬意をこめて呼んだ通称である。つまり沛公は庄屋クラスの家の三男坊である。――このように説明してある。

身分的な差別意識の強い中国にあって、家柄よりも能力の面が強く出ていた此の時代ではあっても、これだけの身分の差は、ちぢまるものではあるまい。世世楚の将軍の家柄に生まれた項羽が、沛の庄屋の家に生まれた沛公に対して抱く感情は「どこの馬の骨ともわからぬ奴めが、この俺様と張りあうとは。」という悔蔑感であったろう。これまでそのように考えてきた沛公に、肝心なところで先をこされたことは、先にも述べたように、項羽の自尊心をひどく傷つけたことは間違いないだろう。

また両者の年令の差ということも関係がある。時に項羽は二十七歳、これに対して沛公は四十一歳。若いころから落ちつきのある、思慮深い沛公、年とともに加わってきた老獪さ。この老獪さに、項羽はしばしば苦汁を飲まされていたに違いない。その沛公の老獪さに対する憎しみ、いらだたしさも、項羽にはあったろう。

以上のべたような事を背景とし、直接的には此のただ沛公に先をこされたことが原因となって、項羽の沛公に対する怒りが爆発したものとみてよかろう。

以上のべたことを中心として、この段は理解すべきものと考えるが、その他、気付きを付け加えるならば、まず教科書における段落の切り方について。

それは、

項羽遂入至于戲西。沛公軍霸上、未得與項羽相見。

沛公左司馬曹無傷使人言於項羽曰、

という個所についてである。結論をいえば、「沛公軍霸上、未得與項羽見」という文は、次の段落に含められるべきものであろう、ということである。このあたりの文脈は、

沛公が秦の都咸陽を破ったという情報は、項羽をいたく怒らせた。項羽はすぐさま当陽君らに命じて函谷関を攻撃させ、余勢をかって関中に入り、戲水の西にやってきた。

さて沛公の方は霸上に陣を布いたまま、まだ項羽に会えずにいた。そのような時に、沛公の左司馬曹無傷が人を遣し、項羽に次のようなことを伝えてきたのである。……

のように続いてゆくものと思う。遷の気持ちを推しはかるに、戲西に軍を進めてきた項羽に対して、一方、沛公の軍は、というものであり、その沛公の軍にあった曹無傷が、……ということを言ってきた。というものであったろう。したがって、ここは当然、「沛公軍霸上云云」で改行すべきところである。

次に訓読について言えば、

項羽大怒曰、旦日饗士卒、為擊破沛公軍。という訓みは、中国古典選「史記」のように、

項羽大怒曰、旦日饗士卒、為擊破沛公軍。

とあるべきではなかろうか。項羽が大いに怒って、部下の将軍に「明日部隊の士卒たちに大いにふるまって、沛公の軍を撃破してくれ。」と命じたわけである。「……沛公の軍を撃破するを為さん」では、そこにこめられた項羽の語気がよくわからない。

○楚左尹項伯者、項羽季父也。素善留侯張良、張良是時従沛公。項伯乃夜馳之沛公軍、私見張良、具告以事、欲呼張良與俱去。曰、「毋従俱死也。」張良曰、「臣為韓王送沛公。沛公今事有急、亡去不義。不可不語。」

良乃入、具告沛公。沛公大驚曰、「為之奈何。」張良曰、「誰為大王為此計者。」曰、「鯫生説我曰、『距関毋内諸侯、秦地可盡王也。』故聽之。」良曰、「料大王士卒。足以当項王乎。」沛公黙然。曰、「固不如也。且為之奈何。」張良曰、「請、往謂項伯、言沛公不敢背項王也。」沛公曰、「君安與項伯有故。」張良曰、「秦時與臣遊。項伯殺人、臣活之。今事有急。故幸来告良。」沛公曰、「孰與君少長。」良曰、「長於臣。」沛公曰、「君為我呼入。吾得兄事之。」

張良出、要項伯。項伯即入見沛公。沛公奉巵酒為寿、約為婚姻曰、「吾入関、秋毫不敢有所近。籍吏民、封府庫、而待将軍。所以遣将守関者、備他盗之出入與非常也。日夜望将軍至。豈敢反乎。願伯具言臣之不敢倍徳也。」項伯許諾、謂沛公曰、「旦日不可不蚤自来謝項王。」沛公曰、「諾。」

於是、項伯復夜去、至軍中、具以沛公言、報項王。因言曰、「沛公不先破関中、公豈敢入乎。今人有大功。而擊之、不義也。不如

因善遇之。」項王許諾。

この部分においては、危険が迫った場合における沛公の態度に焦点を合わすべきであろう。身の安全を保つためには、手段を選ばない沛公は、項伯に対して徹底的に低姿勢となり、また部下に対しても虚勢をはることなく援助を求める。それは気位の高さのために孤立し、そうして滅亡してしまった項羽とは対照的な点であり、結果的にはそれが、天下をわがものにすることのできた大きな原因となったわけである。そのような沛公の性格は、具体的には此の段の、張良に対する、また項伯に対する言葉に現われている。

まず張良に対しては、彼が楚の左尹項伯がもたらした楚軍の情報を沛公に告げると、沛公は、

大驚曰、為之奈体何。

「どうしたらよかろうか」と依りかかる。さらにまた張良が、「大王の士卒を料るに、以て項王に当たるに足るか」とたずねると、沛公はしばらく黙していたが、

固不如也。且為之奈何。

と言う。この「為之奈何」（どうしたらよかろう）ということばに、沛公の性格を見て、そのような、一見うろたえているようにみえる沛公の態度、実はそのうらに、周囲の人々の知恵を完全に吸収し利用しようとする沛公の計算があるのかも知れないが、そのような沛公の態度を、この段を貫く大きな筋と考えてよかろう。

「為之奈何」ということばは、「項羽本紀」において、この他になお二例みえる。すなわち項羽の宴坐において、沛公が剛に立つとみせて危機を脱する場面で、樊噲に、

今者、出来辞也。為之奈何。

「さよならの挨拶をしてこなかった。どうしたらよかろうか」とたずねるものと、漢の五年、項羽追撃にうつった沛公は、約束していた韓信と彭越の軍が集まって来なかったために、逆に楚軍に大打撃を被るが、その際に張良に向かって、

諸侯不従約、為之奈何。

というものとである。

ところが、以上のそれぞれの場面について「高祖本紀」を見ても、「為之奈何」ということばを沛公は吐いていない。「項羽本紀」の沛公だけが「為之奈何」を連発して張良や樊噲に依りかかっているのは、やはり司馬遷の、そのような面の全くみられない項羽と対照的に沛公を描き出し、それによって項羽の性格を浮き彫りにしようという試みにほかならない。そのような司馬遷の意図を、「為之奈何」という沛公のことばに読みとらねばならない。

次に、項伯に対する沛公の低姿勢ぶりについて。張良から項伯の伝えてきた話をきかされた沛公は、項伯に「兄事」し、「婚姻を為すを約」し、自らを「臣」と称して、

不敢有所近
豈敢反乎
不敢倍徳也

のごとく、本来「近づけること」「反すること」また「徳に倍くこと」の許されない身分、立場に、自分はあるものとして、項羽を出しぬく意図の全く無かったことを力説し、それを項羽に伝えてくれるように、項伯に頼みこむ。このような沛公の低姿勢ぶりを、さきの、部下である張良らに対する「為之奈何」ということばとともに、この段では中心におかねばならないだろう。

なお沛公の弁解のことばの中の、

所以遣将守関者、備他盗之出入與非常也。

という事についてであるが、これが明らかに言いのがれのための嘘であることは、後に、張良の「誰か大王の為に此の計を為す者ぞ。」という問いに対して、「鯫生我に説きて曰く、『関を距ぎて諸侯を内るる母くんば、秦の地盡く王たる可きなり』。故に之を聴せり。」と言っていることによってわかるが、その点については「高祖本紀」には次のように記されている。

或説沛公曰「秦富十倍天下、地形彊。今聞章邯降項羽。項羽乃号為雍王王関中。今則来、沛公恐不得有此。可急使兵守函谷関、無内諸侯軍。稍徵関中兵、以自益距之。」沛公然其計従之。

このように沛公は、諸侯の軍を関中に入れないようにするために、兵に函谷関を守らせたのである。それは沛公が、参謀の張良に相談もしないで、このたびのような結果になることを考えもせずに聴き入れた計略であった。このあたりは、咄嗟の場合にはぼろを出してしまう沛公の粗雑な一面を物語るものである。このことから考えてみれば、危険が迫った際の沛公の「為之奈何」について、さきに「周囲の人々の知恵を完全に吸収し利用しょうとする沛公の計算か」といったが、実はそれほどでもないのかもしれない。

ところで此の段には、よくわからぬことが一つある。それは楚の左尹、項羽の伯父（本文には季父とあるが、すでに項羽本紀の冒頭において、『其季父項梁』とあるので、項伯は多分、伯父であろうと思う）である項伯の行動およびそれに対する項羽の態度についてである。すなわち項伯は、夜ひそかに沛公の軍に行き、かつての恩人である張良に、項羽が明朝、沛公の軍に攻撃をかけようとしていることを告げ、一緒に逃げようとさそうが、「亡げ去るは不義なり、告げざるべからず」という張良のために沛公の前に連れてゆかれる。そこで沛公に、項羽との仲をとりもつことを懇願され、その足で復た楚の軍に帰り、項羽に沛公の言を告げる、というくだりである。自軍の機密を漏らしておいて、ぬけぬけと軍中に帰り、しかも項羽に沛公の言を伝えるということが、いったいどうしてできたのか。まことに不可解な話である。当然、軍機漏洩のかどで死罪は免れぬ場面である。この点についてはすでに、清人梁玉繩が、

項伯之招子房、非奉羽之命也。何以言報。且和良会沛、伯負漏帥之重罪、尚能告羽乎。使羽詰曰「公安與沛公語、」則伯将奚対。史果可盡信哉。

と述べているが、司馬遷はその点について、どのように解し記録したのか。あるいは伯父に対しては、たとえどのような行動とられても、強いことは言えなかったのかもしれないが、それにしてはあまりに事は重大である。

○沛公旦日従百餘騎、来見項王、至鴻門、謝曰、「臣與将軍戮力而攻秦。将軍戰河北、臣戰河南。然不自意、能先入関破秦、得復見将軍於此。今者、有小人之言、令将軍與臣有郤。」項王曰、「此沛公左司馬曹無傷言之。不然、籍何以至此。」

項王即日因留沛公與飲。項王・項伯東嚮坐、亜父南嚮坐。亜父者、范増也。沛公比嚮坐。張良西嚮侍。范増数目項王、挙所佩玉玦、以示之者三。項王黙然不応。范増起、出召項荘、謂曰、「君王為人不忍。若入前為寿。寿畢請以剣舞、因撃沛公於坐殺之。不者、若属皆且為所虜。」

莊則入為壽。壽畢曰、「君王與沛公飲。軍中無以為樂。請以劍舞。」項王曰、「諾。」項莊拔劍起舞。項伯亦拔劍起舞、常以身翼蔽沛公。莊不得擊。

ここには「鴻門の会」のやま場が用意されている。「臣」ということばを連発して、相い変わらずの低姿勢をとる沛公。前夜、沛公に優待されて沛公に傾いてしまっている項伯。その項伯に上手にまるめこまれて、それまで烈火のごとく燃えさかっていた沛公に対する怒りの衰えた項羽。そのような項羽に歯がみしてくやしがる范増。これらの人物のからみあいのうちに話はすすんでゆく。その中で、范増の、項羽に対する身心両面の動きが中心となっている。

東嚮して坐した項羽の左手に南嚮して坐した范増は、自分の正面に坐している沛公をにらみつけながら、

数目項王、挙所佩玉玦、以示之三。

「はやく殺ってしまいましょう」と、幾度も項羽に目くばせし、腰の玉玦を挙げてはその決断をうながす。しかし項羽は、

黙然不応

あれだけ言っておいたのに、何を今さら……と、にえきらない項羽の態度に我慢できなくなった范増は、坐を立って次の手段を講ずる。すなわち坐をはずした范増は、項羽のいとこの項荘を召して、「沛公を殺せ。もし仕損じたら、お前ら一族は沛公の虜になってしまうぞ」と言いふくめる。それにつづいて展開される場面は、この「鴻門の会」におけるクライマックスである。剣の舞いを舞いながら、沛公を殺す機会をうかがう項荘。それをじっと見守る范増。それと気付いたはずの項羽の気持ちは……。また范増を一目見た時から、ねらわれていることを直感し、そうしてそれが事実となり、今や俎の上の魚同然の身となってしまった沛公の心中は。このまま時がたてば、血しぶきをあげて項荘の剣に倒れる沛公の姿が、そこに見られるはずであった。しかしそこに、歴史を書きかえさせるべく、見方をかえれば、今日見るような歴史とすべく、一人の男が現われる。それは沛公にまるめこまれてしまった項伯である。――「項伯亦拔劍起舞、常以身翼蔽沛公。」そのために項荘は、どうしても沛公を撃つことができない。その状態はなおもつづき、緊張した時が刻一刻と過ぎる。しかしこのままでは、どうしても沛公は殺されてしまう。いかに項伯が頑張ったところで、所詮は一人、范増もいつまでもこの状態のままではおかないであろう。必ず沛公は殺される。――そばではらはらしながら様子を見まもっていた張良は、（もし自分がその場にとび出していったら、その場の空気を、沛公を殺す方向に向けてしまうことを、張良は知っていたのであろう）皆の注意が、項荘、項伯、それから沛公の上にあるのを幸いに、そこをそっとぬけ出し、軍門で主人の安否を気遣っているはずの樊噲に助けを求めに行くのである。

この段で注意すべき点は、項羽の性格、すなわち范増が項荘に言った「君王為人不忍」というものである。これは「大いに怒る」項羽の持つ、もう一つの性格である。「怒ると、どんなに残酷なことでも平気でやってしまう項羽ではあったが、その反面に「人となり忍びず」つまり人なみすぎて情深いところがあるわけである。

項羽の性格について、韓信が次のようにも言っている。信が沛公の前で、かつての主人項羽の人がらについて述べる場面である。

信曰「大王自料、勇悍仁彊、孰與項王。」漢王黙然良久、曰「不如也。」信再拜賀曰「惟信亦為大王不如也。然臣嘗事之。請言項

王之為人也。項王喑啞叱咤。千人皆廃。然不能任属賢将。此特匹夫之勇耳。項王見人、恭敬慈愛、言語嘔嘔。人有疾病、涕泣分食飲。至使人有功当封爵者、印刓弊、忍不能予。此所謂婦人之仁也。（淮陰侯列伝）

つまり韓信は、「匹夫之勇」と「婦人之仁」の持ち主と、項羽を評している。この信の言を借りるならば、この際どうしても沛公を殺さねばならないという范増の進言を拒否したのは、この「婦人の仁」ということになろうか。そうしてこの「婦人の仁」、范増の言によれば「忍びざる」性格は、人間の心としては美しいものではあるけれども、覇者の心には不要のものであり、それある故に、項羽は覇業を成しとげることができなかったのである。

そうして司馬遷は、そのような項羽の性格と対照的に、沛公の非情な性格と行動を、「項羽本紀」の別の場所では描いている。たとえば、楚軍に敗れた沛公が、わずかの手勢をつれ逃れる途中、

漢王道逢得孝恵・魯元、乃載行。楚騎追漢王。漢王急、推堕孝恵・魯元車下。滕公常下収載之。如是者三。曰「雖急不可以駆。奈何棄之。」於是遂得脱。

わが身の安全を保つために、実の子供を車から三度も突き落とす。

さらにまた「項羽本紀」に、項羽がかねて捕えて軍中においていた沛公の父大公を俎の上にのせて、対峙している沛公の軍の前に引き出し、「今急ぎ下らずんば、吾太公を烹(に)ん」と言うと、沛公は、

吾與項羽俱北面、受命懐王。曰「約為兄弟。吾翁即若翁。必欲烹而翁、則幸分我一栖羹。」

と答えた。怒った項王は太公を殺そうとしたが、またもや項伯の「天下の事は未だ知るべからず。且つ天下を為(おさ)めんとする者は家を顧りみず。之を殺すと雖も益なし。祇(ただ)禍を益すのみ。」ということばによって思いとどまっている。

このように、情にもろい英雄項羽に対する、血も涙もない非情な沛公、この極端な対置にも、項羽の性格を際立たせようとする司馬遷の意図を考えねばならないだろう。

○於是、張良至軍門見樊噲。樊噲曰、「今日之事何如。」良曰、「甚急。今者、項荘抜剣舞。其意常在沛公也。」噲曰、「此迫矣。臣請入與之同命。」噲即帯剣、擁盾入軍門。交戟之衛士、欲止不内。樊噲側其盾、以撞衛士仆地。噲遂入、披帷西嚮立、瞋目視項王。頭髪上指、目眦盡裂。項王按剣而跽曰、「客何為者。」張良曰、「沛公之参乗樊噲者也。」項王曰、「壮士。賜之巵酒。」則與斗巵酒。噲拝謝起、立而飲之。項王曰、「賜之彘肩。」則與一生彘肩。樊噲覆其盾於地、加彘肩上、抜剣切而啖之。項王曰、「壮士、能覆飲乎。」樊噲曰、「臣死且不避。巵酒安足辞。夫秦王有虎狼之心。殺人如不能挙、刑人如恐不勝。天下皆叛之。懐王與諸将約曰、『先破秦入咸陽者王之』今、沛公先破秦、入咸陽。毫毛不敢有所近。封閉宮室、還軍覇上、以待大王来。故遣将守関者、備他盗出入與非常也。労苦而功高如此。未有封侯之賞。而聴細説、欲誅有功之人。此亡秦之続耳。竊為大王不取也。」項王未有以応。曰、「坐。」

この段落では、沛公の臣樊噲と項王との対面が中心となる。

まず張良が「項荘剣を抜きて起ちて舞う。項伯も亦た剣を抜きて起ちて舞い、常は身を以て沛公を翼蔽す。荘は撃つことを得ず。」という状態を目の前にしてじっとしておれず、沛公の供をして来た百餘騎の兵とともに軍門にとどめられ、今朝ほどからの事の次第を

心配している樊噲のところに、どうにかしなれば、という切羽つまった気持ちで会いに行くところから始まる。司馬遷は、「甚だ急なり。今、項荘剣を抜いて舞う。其の意は常に沛公に在るなり。」という張良の報告を聞いて、主君沛公の側にかけつける樊噲の様子を見事に描写している。

中に入れまいとする交戟の衛士を、その盾で撞き仆し、そのまま軍中をかけぬけて、目指す宴坐の帷を披げて西嚮して立つ。「西嚮」とは、項王を真正面に見る位置。そこで怒りの形相ものすごく項王をにらみつける樊噲。――頭髪上指、目眦盡裂――。それに対して項王は、剣を跽じて眦して「客何為者」と言う。「客何為者」とは勿論「おまえは何者だ」であって「おまえは誰か」という意味ではない。不意に壮士にとび込まれて項王は、それでも、とっさに刀の柄に手をかけて、片ひざ立てた抜き打ちのかまえでこう言ったのである。（だから当然、項王をふくめて此の坐の人々は、あぐらをかいて坐っていたものと思われる。）もし、このままの状態がしばらくでもつづいておれば、二人の間に、とりかえしのつかない事態が生じていたかもしれない。が、その時、樊噲の後を追って来ていた張良が、にらみ合う二人の間にはいって樊噲を紹介する。

この部分は樊噲の列伝では次のように述べられている。

時独沛公與張得入坐。樊噲在営外。聞事急、乃持鉄盾入到営。営衛止噲。噲直撞入、立帳下。項羽目之、問為誰。張良曰「……主人沛公と張良だけが中に入れられ、営外で事の成り行きを心配していた噲が、放たれた矢のように、項羽の軍営を突切る描写は、言うまでもなく「項羽本紀」の方がすぐれている。ただこの列伝では、本紀で「客何為者」となっていたものが「問為誰」となっている。「誰だ」と「何者だ」とは、私の主観的な判断かもしれないが、「何者だ」の方が、項羽の口から、とっさに出たことばとしてふさわしいように思う。

この段のもう一つの要点は、樊噲に、筋の通らぬその行動を追及されて、何とも返答ができず、ただ「坐」とだけ言うところであろう。この部分も樊噲の列伝では、次のように記されている。

「且沛公先入定咸陽、暴師霸上、以待大王。大王今日至、聽小人之言、與沛公有隙。臣恐天下解、心疑大王也。」項羽黙然。

すでに「項羽本紀」で述べたからであろうか、叙述はいたって簡単である。

要するに、懐王が諸将と交した約束、それに咸陽を定めた後の沛公の態度、行動を並べたて、それらを全て無視し、小人の言を聴いて、沛公を誅殺しようとする項羽の行動を、筋道たてて責めたてる樊噲の弁論に、項羽としては一言の返すことばも無かったのである。まことに此の段の樊噲は、武勇と弁論とを兼ね備えた武将として描かれており、かつての「鼓刀屠狗」（樊噲列伝）の面影は、どこにもうかがうことはできない。司馬遷は此の日の樊噲について「是の日樊噲営に犇入し、項羽を譙讓すること微かりせば、沛公の事幾んど殆うし」（樊噲列伝）と述べている。

○樊噲従良坐。坐須臾沛公起如厠。因招樊噲出。沛公已出。項王使都尉陳平召沛公。沛公曰、「今者、出未辞也。為之奈何。」樊噲曰、「大行不顧細謹、大礼不辞小讓。如今、人方為刀俎、我為魚肉。何辞為。」於是遂去。

乃令張良留謝。良問曰、「大王来何操。」曰、「我持白璧一雙

欲献項王、玉斗一雙欲與亜父、曾其怒、不敢献。公為我献之。」
張良曰、「謹諾。」
当是時、項王軍在鴻門下、沛公軍在霸上、相去四十里。沛公則置車騎、脱身独騎、與樊噲・夏侯嬰・靳彊・紀信等四人持剣盾歩走、従酈山下、道芷陽間行。沛公謂張良曰、「従此道至吾軍、不過二十里耳。度我至軍中、公乃入。」

則に如く（本当にそのためかどうかは別にして）ついでに、樊噲を招いて外に出た沛公には、勿論、項羽の宴坐に帰る意志は無いわけであるから、なかなか帰って来ない。なかなか帰って来ない沛公に、さすがに不審を感じたのであろう、項羽は陳平に呼びにやらせた。その次の記述は、読者に対しては甚だ不親切に思える。つまり説明不足なものである。すなわち、

項王使都尉陳平召沛公。沛公曰、「今者、出未辞也。為之奈何。」
樊噲曰、「……」

沛公は樊噲にむかって「今出ずるに未だ辞せざるなり。之を為すこと奈何ん。」と言うわけであるが、そのためには、その前の「項王は都尉陳平をして沛公を召さしむ。」の次に、時間的にも、また内容的にも、大きな省略があると考えねばならないだろう。この間の事情について想像をたくましくすれば、陳平は後に項羽の下を離れて沛公の側に付き、宰相にまで出世した人物であるから、或はすでにこのあたりから、沛公の為にすることがあったのかも知れない。つまり見て見ぬふりをしたようなことがあったとしても不思議ではなかろう。しかしながら陳平のその時の行動については一言も触れないで、場面はすぐに沛公と樊噲との対話に移る。司馬遷は、どのような意図のもとにこの省略を行なったのであろうか。

さてここで、「鴻門の会」における、沛公の三度目の「為之奈何」が出てくる。「どうしたらよかろうか。」――沛公お得意のポーズである。それに乗って樊噲は、どこかで聞きかじった古語を並べて、沛公に脱出をすすめる。――「大行不顧細謹、大礼不辞小譲。」当時よく口にされていた文句ででもあったのであろうか、人を殺すことしか能が無く、もちろん書物を読んだことも無かったであろう彼としては、精一杯のことばであったろう。

ところで此の段では、時間差表現とでも言うべき表現技術がある。すなわち、

於是遂去

とありながら、その次に、去る以前の事柄が、

乃令張良留謝……

と述べられ、また、

従酈山下、道芷陽間行。

と記しながら、間行する前の様子が、

沛公謂張良曰「……

と述べられることである。

「遂に去る」と言っておきながら、その次に、去る前に張良に留まり謝することを依頼することを述べ、「間行す」と言っておきながら、その次に、間行する前に張良に言った沛公のことばを記す司馬遷は、そこに、読者に与えるどのような効果を期待したのであろうか。

もちろん司馬遷が、「是に於て遂に去らんとす。」「乃ち張良をして留まり謝せしむ。」そうして「酈山の下より、芷陽に道して間行せんとす。」「沛公は張良に謂いて曰く……。」というつもりで書

いたものとすれば、時間的につじつまは合う。しかし司馬遷のつもりは、そうではなかったろうと思う。遷は、

○樊噲にすすめられて、脱出を決意する場
○張良に、項羽と范増への贈物を依頼する場
○脱出の場
○張良に脱出後の処置について念を押す場

と、場面を短かく、次々とつないでゆくことによって、一刻を争う緊迫感を表わそうとしたのではなかろうか。もしこれらの場面を、時間の経過にしたがって述べてゆくとすると、それは必ず間のびのした、しまらぬものとなってしまうような気がする。

それともう一つ考えに入れておかねばならないことがある。それは、後に残された張良の立場である。沛公は、今朝がた従えて来た百餘騎の従者と張良とを残して、樊噲、夏侯嬰、靳疆、紀信ら四人と間道を脱出して行くのであるが、残された者たちを待ちうけているのは何かといえば、それは、沛公脱出で頭にきた項羽の殺戮以外の何ものでもないはずである。気にくわぬことが少しでもあると、青天の霹靂のごとく怒りだす項羽は、たとえ項伯がいたとしても、どうすることもできないであろう。当然、沛公の身代りとして、少くとも無事には帰れぬことを覚悟する必要があったはずである。したがって張良にとっては、それだけの覚悟をきめたうえでの「謹みて諾す。」であり、残留であった。そのような覚悟のなかで、張良は沛公から託された事後処理と、沛公が覇上の軍中に到着するまでの時間かせぎとを、冷静かつ着実に果たすのである。「此れ迫れり。臣請う、入りて之と命を同じくせん」と叫んで、営中にとび込んでいった樊噲、困難な役目を引き受けて見事にそれを果たす張良。沛公の下には、沛公のためなら身命を賭して働く人物が多くいた。沛公に従って脱出した夏侯嬰は、沛公の忠実な御者。紀信は後に沛公の身代りとなって項羽に殺された勇将である。そのような人物が、その側にあまり目につかぬ項羽の場合と比べてみて、沛公には、人の心をつかむ何らかの力が備わっていたと思わざるを得ない。司馬遷は、沛公が次の天下を握る能力の持主であることを、項羽の場合と対照的に、各処でそれとなく述べている。

○沛公已去。間至軍中、張良入謝曰、「沛公不勝桮杓、不能辞。謹使臣良奉白璧一雙、再拜献大王足下、玉斗一雙、再拜奉大将軍足下。」項王曰、「沛公安在。」良曰、「聞大王有意督過之、脱身独去。已至軍矣。」項王則受璧、置之坐上。亜父受玉斗置之地、抜剣撞而破之曰、「唉、豎子不足與謀。奪項王天下者、必沛公也。吾属今為之虜矣。」

沛公至軍、立誅殺曹無傷。

まず張良が項王の前に進み出てのことばについて。――「沛公不勝桮杓、不能辞。」これを、「沛公はご酒に弱いので、おいとまごいの挨拶をいたしかねました。」のように、すでに帰ってしまったことを前提にしての言葉としては、次の項王の言葉、――「沛公安在」（沛公はいずれにおられる）と、うまくつづかないように思う。ここは張良が、項羽の気持ちを急に刺激することをさけようとしてか、沛公が已に去ってしまったことはひとまず伏せておき、（どうせばれることではあるが）「沛公はご酒に弱いので、おいとまごいの挨拶ができませぬ。それゆえ私に……」という気持ちではないだろうか。そのように考えると、次の項王の「沛公はいずれに

おられる。」という言葉がぴったりくる。そう問われて仕方なく、といっても予定通りのことであるが、――「聞大王有意督過之、脱身独去。已至軍矣。」という、張良の腹をすえての返事が出てくるのである。

そういう張良の返事を聞いての項王の態度については、亜父の態度と比較しながら考えなければならない。

項王則受璧、置之坐上。

亜父受玉斗、置之地、抜剣撞而破之、

沛公の贈物の璧を受け取って坐のほとりに置いた項王に対して、亜父は、さし出された玉斗を地に置くや、剣を抜いて撞き破ってしまう。項王には、まだ沛公に謀られたことが、まだピンとこない。もちろん沛公を逃がしたことの重大性についても、まだ気がつかない。しかし亜父には、今日沛公を見すみす逃がしたことが、将来どんな結果を招くことになるかということが、わかりすぎるほどわかっていたのである。すでに函谷関を突破して鴻門に着いた時に、項羽に「吾人をして其の気を望ましむるに、皆な龍虎を為し、五采を成す。此れ天子の気なり。急き撃ちて失うことと勿れ。」と念を押しているし、酒宴の坐においても、「数しば項王に目して、佩ぶる所の玉玦を挙げ、以て之に示すこと三たび」し、それに、「黙然として応ぜざ」る項王に業をにやして、今度は項王のいとこの項荘を召して、「……因りて沛公を坐に撃ちて之を殺せ。しからずんば、若が属、皆な且に虜とするところと為らんとす。」と、絶対にしてくじるではないぞ、と沛公撃殺を命じている。このように、「鴻門の会」の最初から、この際、沛公を殺してしまおうとねらいつづけている范増にとって、見すみすその脱出を許したことは、玉斗を撞き破ったくらいではおさまりのつかない痛恨事であった。そのような彼の心中は、

唉、豎子、不足與謀。奪項王天下者、必沛公也。吾属今為之虜矣。

ということばに託されてる。それは、天下平定の念願を項羽に託し、今や天下を手中にしながら、むざむざ逃がしてしまった項羽に対する腹立たしさ、絶望感である。この「鴻門の会」を頂点として、項羽の勢いは次第に下り坂になってゆく。なお「豎子」について、教科書の頭注には「ここでは項羽をさす」とあるが、そばにいる項羽は向かって、あからさまに「小僧め！」とは、いかに気が立っているとはいえ、無理だろう。やはりここは、直接には項伯をなじり、暗に項羽の優柔不断を諷したもの、と解すべきであろう。

結局この場は、樊噲の伝に、

使張良謝項羽、項羽亦因遂已無誅沛公之心矣。

と記してあるように、項王に沛公を殺す気を無くしてしまわせた、張良の、緻密な計算にもとづく落ちついた行動と、一杯くわされてまだピンとこない項羽、それとは対照的に、天を仰いでくやしがる范増とに焦点をあわせたい。

二、四面楚歌

教科書では、「鴻門の会」のあと、すぐに「四面楚歌」となり、「項王軍壁垓下。其少食盡」で始まるので、「鴻門の会」が「沛公至軍、立誅殺曹無傷」。で終わって以後の、項羽と沛公の行動については、読者には何もわからない。したがって「鴻門の会」から「四面楚歌」にはいる前に、どうしても、その間の事情が説明されな

ければならない。項羽の最期だけを読むことに、それほど意味があるとは思えないからである。何故に項羽がそのような最期をとげねばならなかったのか、それを読みとらなければ、司馬遷が「項羽本紀」に、更には「史記」に託した意図を理触することもできず、したがって「史記」を読んだことにはならないからである。そのようなわけで「四面楚歌」にはいる前に、そこに至るまでの事情が、項羽と沛公を中心として説明されねばならないだろう。

○項王軍壁垓下。兵少食盡。漢軍及諸侯其囲之数重。夜聞漢軍四面皆楚歌、項王乃大驚曰、「漢皆已得楚乎。是何楚人之多也。」項王則夜起飲帳中。有美人、名虞、常幸従。駿馬、名騅、常騎之。於是項王乃悲歌慷慨、自為詩曰、「力抜山兮気蓋世、時下利兮騅下逝、騅不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何。」歌数闋、美人和之。項王泣数行下。左右皆泣、莫能仰視。

この部分では「鴻門の会」以後、「項王壁垓下」に至るまでの事情が説明されておれば、生徒は、極端にいえば、ただ読むだけで充分に理触でき、その雰囲気にひたることができるであろう。したがって「皆な已に楚を得たるか。是れ何ぞ楚人の多きや。」という項羽の驚愕も、また、項羽の詩にこめられている断腸の思いも、説明の要はないであろう。それまで項羽の歩んだ道が、才気と勇力を誇る英雄の、栄光にみちたものであればあるほど、この場面における驚愕と歎きは大きいからである。

ところで、この場面の次にあるはずの、項羽の脱出、快戦の記述が、この教科書では省略されている。この部分は、項羽が次第に勢いをそがれてゆき、死を決意したもの、己の才気と勇力に対する自負はそのままに、全ての原因を「天」に帰する場面であり、次の、烏江の亭長との対話の内容、項羽の最期に、大いに関係のあるところである。すなわち、

於是項王乃上馬騎。麾下壮士、騎従者八百餘人。直夜潰囲、南出馳走。平明漢軍乃覚之。令騎将灌嬰以五千騎追之。

項王渡淮。騎能属者百餘人耳。項王至陰陵、迷失道。問一田父。田父紿曰「左」。左。乃陥大沢中。以故漢追乃之。

項王乃復引其而東、至東城。乃有二十八騎。漢騎追者数千人。項王自度不得脱、謂其騎曰「告起兵至今八歳矣。身七十餘戦、所当者破、所撃者服、未嘗敗北、遂覇有天下。然今卒困於此。此天之亡我、非戦之罪也。今日固決死。願為諸君快戦、必三勝之。為諸君潰囲、斬将刈旗、令諸君知天亡我、非戦之罪也。」乃分其騎以為四隊、四嚮。

漢軍囲之数重。項王謂其騎曰「吾為公取彼一将。」令四面騎馳下、期山東為三処。於是項王大呼馳下。漢軍皆披靡。遂斬漢一将。是時赤泉侯為騎将追項王。項王瞋目而叱之。赤泉侯、人馬俱驚、辟易数里。與其騎為三処。

漢軍不知項王所在。乃分軍為三、復囲之。項王乃馳、復斬漢一都尉、殺数十百人。復聚其騎、亡其両騎耳。乃謂其騎曰「何如。」騎皆伏曰「如大王言。」

虞美人自盡の記事は「史記」にはない。兵家の常として、それは言うまでもないことだったのかも知れない。虞美人に永遠の別れを告げた項羽は、夜中に漢軍の囲みを脱けて南に走る。従う者は八百餘騎。平明にれそを覚った沛公は灌嬰の卒いる五千騎にそれを追撃さ

せる。項羽は、→淮水→陰陵→東城、という経路で逃げてゆく。逃げてゆくにしたがって、従者は八百餘人→百餘人→二十八騎、と減ってゆく。

数千騎の漢軍に追われ、一田父に紿されて、次第にその勢いをそがれてゆく過程が、ここでは述べられているわけである。

そうしてその次には、二十八騎にまで討ちへらされて「自から脱るるを得ざることを度り」「死を決し」た項羽が、このような結果になったのは「天の我を亡ぼす」が為であり、自分の「戦いの罪に非ざる」ことを、部下に示し、また自分に納得させるための「快戦」の場面が設けられている。

したがって、此の部分なくしては、次の段の、項羽が烏江の亭長の申し出を断ったこと、また亭長に向っての「天の我を亡ぼすに、我何ぞ渡ることを為さん……」という項羽のことばが、唐突に、また、何か薄っぺらなものにひびく。やはり此の部分は、項羽が「自から脱るるを得ざることを度り」「死を決す」る過程と、そのようになったのは、「天の我を亡ぼす」ためであり「戦の罪に非ざる」ことを、ひたすら自分に言いきかせ、さらに証明しようとする項羽の姿を、次の段の「項羽の最期」にはいるまえに強調するために、どうしても必要であろう。

○項王乃欲東渡烏江。烏江亭長艤船待。謂項王曰、「江東雖小、地方千里、衆数十万人、亦足王也。願大王急渡。今独臣有船。漢軍至無以渡。」項王笑曰、「天之亡我、我何渡為。且籍與江東子第八千人、渡江而西。今無一人還。縱江東父兄憐而王我。我何面目見之。縱彼不言、籍独不愧於心乎」。乃謂亭長曰、「吾知公長者。吾騎此馬五歳、所當無敵。嘗一日行千里。不忍殺之。以賜公。」

「東のかた烏江を渡らんと欲し」た項羽でありながら烏江の亭長が船を用意して、「願わくは大王急ぎ渡れ。今独り臣のみ船あり。漢の軍至るも、以て渡ること無けん。」と言うと、すぐに予定を変更して烏江を渡ることをやめ、「天の我を亡ぼす、我何ぞ渡ることを為さん。」と言っていることが、先ず問題となるだろう。この時の項羽の心理については、どのように説明すべきか。

もとより、「天が自分を亡ぼ」そうとしていると信じ、そのように自分に言いきかせてきた項羽であるから、亭長の救いの手を断って不思議はないが、「烏江を渡らんと欲」していながら、亭長の出現によって、急に渡江の意志を変えた点が、読む者にとっては腑におちないのである。

この点については、私自身あまりはっきりしないけれども、項羽の人一倍つよい自尊心と、強情な性格が、主な原因ではなかったかと思う。その強情で自尊心の強い性格、ことばをかえれば、江東の父兄の興望を一身になってきた将軍としての面子が人一倍つよかったことについては、その亭長に対することば、「籍は江東の子弟八千人と、江を渡りて西す。今一人の還るもの無し。縱い江東の父兄、憐れみて我を王とすとも、我何の面目ありてか之に見えん。縱い彼言わずとも、籍独り心に愧じざらんや。」からも知られよう。

つまり、必死に戦いつづける項羽の頭の中から一時的に消えていた「天の我を亡ぼす」ということがらと、誇り高き将軍としての意識が、烏江の亭長の出現と、その言葉によって、一度によみがえったのであろう。「項王笑いて曰……。」その「笑い」は天命を甘受しようとする者のあきらめと、西楚の覇王としての自尊心を内包し

た、一見、さわやかなものであったろう。中国古典選の「史記」では、ここの「笑い」を自嘲の笑いと解する。あるいはその面が強調されなければならいのかも知れないが、私にはそうは思えない。

このあたりの言動も、項羽ならではのものであろう。もし沛公だったら、さっそく亭長の船に一人のり移り、烏江を渡って逃亡に成功していたに違いない。もし項羽に、そのような融通性が少しでもあったならば、と惜しむのは、唐の杜牧である。

題烏江亭

勝敗兵家事不期　包羞忍恥是男兒
江東子弟多才俊　捲土重來未可知

このように思うのは、ただに杜牧だけではなかったろう。

○乃令騎皆下馬歩行、持短兵接戦。独項王所殺漢軍数百人。項王身亦被十餘創、顧見漢騎司馬呂馬童曰、「若非吾故人乎。」馬童面之、指王翳曰、「此項王也。」項王乃曰、「吾聞、『漢購我頭千金・邑万戸。』吾為若徳。」乃自刎而死。

もはやこの段では、極端に言えば、何の説明も必要ではないではないだろう。最期の覚悟をきめた項羽は二十六人の部下とともに「下馬歩行」し「短兵を持して接戦」し、西楚の覇王らしく、華々しく自刎して果てる。

なお、「馬童面之」について、この教科書の頭注には「顔をそむける」とあるが、別の教科書（秀英出版）では、「そちらをむく」と説明されている。どちらかが正しいにちがいないが、今のところ結論は出ないだろう。思うに、項羽に「若は吾が故人に非ずや。」と声をかけられた漢の騎司馬呂馬童が、声の主である嘗ての故人項羽の顔を、真正面から見すえることができたであろうか、という疑問から、「面」字を反訓と解して「そむける」と読むようにもなったのであろう。結局は呂馬童が、ずうずうしい男であったかどうか、ということによってきまるものである。

三、結語

以上は、「史記」の、「鴻門の会」「四面楚歌」について、どこに中心を置いて読み、教えるか、ということを考えながらの教材研究の覚え書きであるが、最後にまとめとして、そのように読み取り、実際に教えた結果について述べておかねばならないだろう。

生徒が「鴻門の会」「四面楚歌」を読んで受け取ったものは、要するに――「史記」には人間が描かれている。司馬遷は生きた人間を描いたのである。それぞれ異なっている、一人ひとりの人間の性格、その性格にもとづく行動を、その内部にまではいり込んで生き生きと描き、そのような人間どうしのぶつかりあいの結果としての「個人の運命」、それを大きく総括したものとしての「人間の歴史」を記そうとした。――ということのようであった。

生徒がくみとった、このような内容については、あるいはまとまりすぎている感じがしないでもないが、それは「四面楚歌」を読みおわったところで、司馬遷について、もうすこし広い知識を得るために、中島敦の「李陵」を読ませたことによるかも知れない。そこでは、主として「史記」の太史公自序にもとづき、司馬遷の「史記」編纂の経緯が、生き生きと述べられている。そこでは司馬遷が、どのような状態において、何を、何のために、どのように述べて

いったか、ということが、司馬遷なみの「想像的視覚」をはたらかせて語られている。先にあげたものは、そのような「李陵」を読み、そうして、これまで読んできた「鴻門の会」「四面楚歌」の、それぞれの場面を想いおこしての、感想なのである。

なお「史記」は、二年生になって初めて「漢文」を読みはじめた学年の二学期に、週二時間ずつの授業で扱ったものである。

（本学付属高校教諭）